
Scientific Approaches to Language No.9 March 2010

はしがき

神田外語大学言語科学研究センター（CLS）の紀要第9号をお届けします。CLSは、本学大学院（言語科学研究科）に附置されており、言語学（英語学、日本語学を含む）および言語教育（特に、英語教育、日本語教育関係）分野の研究について、以下を中心に活動しています。

- (1) 大学院の専任教員やCLS研究員による公的資金の補助を受けた研究プロジェクトの円滑な遂行支援。
- (2) CLS顧問で本学名誉教授の井上 和子先生を囲んでの定期研究会（通称、井上ゼミ）開催。
- (3) 本学大学院修了生の研究活動支援。特に、博士論文執筆予定者（博士論文提出資格をもって後期課程を満期退学した者、上記(1)(2)の活動で中心的な役割を果たしている者などをCLS非常勤研究員とし、その研究活動拠点を提供すると共に、学会発表や論文執筆、実験遂行などを支援。
- (4) 言語学、言語教育学関係の研究会、コロキウム、講演会などの開催。
- (5) 紀要Scientific Approaches to Languageの編纂、刊行。
- (6) 言語学、言語教育関係の研究の広報活動。その一環としてのホームページの開設。

CLSの紀要には、上記活動などからの成果が中心にまとめられており、本号では、言語学関係と言語教育学関係を分け、それぞれ<言語学編><言語教育学編>として取められています。

上記(4)の詳細と各発表・講演の要旨については巻末（299～318頁）をご覧ください。また、(1)に関しては、日本学術振興会 科学研究費補助金（いわゆる科研費）による5件（以下の(ア)～(エ)、うち(イ)(ロ)は今年度から新規）、科学技術振興機構(JST)委託研究による1件(カ)が遂行されました（括弧内は研究代表者）。巻末（319～330頁）には、各プロジェクトの今年度の活動報告の概要が記載されています。

- (ア) 『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』基盤研究（B）（長谷川信子）
- (イ) 『語彙とテキスト理解：読解に関する語彙知識の多面性と語彙の意味について』基盤研究（B）（堀場裕紀江）
- (ロ) 『早期英語教育教材に見る語彙と文法の特徴：真に「英語が使える日本人」育成に向けて』基盤研究（C）（神谷昇）
- (ハ) 『談話のカートグラフィー研究：主文現象と複文現象の統合を目指して』基盤研究（B）（遠藤喜雄）
- (ニ) 『首都圏方言の実態に関する基礎的研究』基盤研究（C）（木川行央）
- (ホ) 『言語学・応用言語学に基づく、外国語能力の検査、判定、評価法の開発』（JST科学技術研究開発センター「脳科学と教育タイプ（II）」の研究課題「言語の発達・脳の成長・言語教育に関する統合的研究」（萩原裕子（首都大学）のサブ領域委託研究として（研究機関代表者：長谷川信子））

こうした活動の遂行は、研究プロジェクトを率いる先生方のご尽力はもちろんのこと、CLS専任研究員の神谷昇さんを中心に、非常勤研究員、大学院生や学部生、そして、事務補佐員の椎名千香子さんの献身的な働きのお陰で可能となっていていきます。心より感謝いたします。

言語学編

遠藤 喜雄

ムードとモーダルのカートグラフィー

本稿では、副詞節に生じるムード表現の性質を探る。まず、英語の条件節に焦点を当て、そこにムードを表す副詞が生じないことをみる。そして、この事実が、Rizzi (2004)の素性によって定義される相対最小性から導かれることを示す。次に、この考えを関係詞節に拡張する。さらに、日本語の条件節に焦点を当て、そこにはある種のムード要素が生じることを見る。最後に、この事実が、井上(2006, 2007)およびKrapova and Cinque (2005)の論じる真性モーダルと疑似モーダルの特性を考慮することにより、英語と同様に、素性によって定義される相対最小性から導かれることを示す。

長谷部 郁子・神谷 昇 「一方」表現の形成について

本稿では、「走り方」や「愛され方」のような動詞の連用形が接辞「一方」により名詞化された表現（「方」表現）を語彙意味論と統語論の観点から議論する。具体的には、「一方」表現には「一方」の補部動詞の種類によって「様態」と「程度」の2つの解釈が生じることを概観し、こうした解釈の違いを説明するために「一方」が付加する動詞の語彙概念構造(LCS)にはACT ONやCONTROL、CAUSEのような上位事象が含まれていなければならないと提案する。また、統語構造において「一方」はNPの主要部Nでありそれがv(*)Pを補部を取る構造を持ち、v*が外項を持つ場合には「方」がv*と関連付けられて様態の解釈が生じる一方、vが外項を持たない場合にはそれが不活性となるためVと関連付けられて程度の解釈が生じると主張する。最後に、このように、LCSと統語構造を検討することにより「一方」表現に説明を与えることは影山(1993)で提案されている「モジュール形態論」の枠組みを支持すると示唆する。

井上 和子 音形を持たない接辞としての補文標識(null Complementizer: null C)

補文標識の中には、主名詞句の内容を表す補文（同格詞句と呼ぶ）を作る「という」「との」とは別に純粋に補文を導入する「と」がある。(i(c))はその例である。

- (i)-(a) 「昨日太平洋岸に津波があった」というニュース
- (b) 「次の会合には出席する」との加藤氏のことば
- (c) 議長は「明日の会議は延期する」といった。
- (d) 議長が欠席したことが問題にされた。
- (e) 地震のニュースが一部に伝わらなかった事実が明らかになった。

これまでの研究では、補文を名詞化する「こと」「事実」(i(d-e))と「と」を区別するに留まり、「と」に関する詳しい研究は無かった。本論文では、「と」の統語上、意味上の特徴を検討し、これらの分布と機能を説明するのに二種類の「と」を仮定し、その根拠を示す。

神谷 昇 日本語のyes/no疑問文の答えの派生と項の削除

本稿では日本語のyes/no疑問文の答えの派生を検討する。より具体的には、Takahashi (2008)の提案する「項の削除」を援用し、日本語のyes/no疑問文の答えの派生にもPFでの項の削除が関与していることを示唆する。このことにより、答えの文における数量詞の作用域に関する事実と、「省略」された目的語が主語位置の「省略」された名詞に束縛されるという事実の説明を与えることができる。

Naoko Okura (大倉 直子) Benefactive Raising in Japanese

The Benefactive construction in Japanese, V-te-age-ru/yar-u, where the donative verb age-ru/yar-u 'give' is involved, has been extensively discussed. One of the issues is how to reconcile the Benefactive interpretation given to a DP and the position where it appears; that is, the Benefactive interpretation should be related to the donative verb 'give'; however, the Benefactive DP sometimes appears to be an argument of a lexical verb and to remain within the VP. In this paper, we will argue that age-ru/yar-u is a realization of an Appl(icative) head, which takes an "applied" argument such as the Benefactive (cf. Pytkkanen 2002, Okura 2006, 2009), and that the Benefactive DP in question is actually raised to a position where a local relationship is established with Appl and the Benefactive interpretation is obtained.

山田 昌史 「AをBに」構文の統語構造：「して」省略のメカニズム

本稿では、「タバコを手に町を歩いた」のような「AをBに」の付帯状況を表す修飾節（本稿では「AをBに」構文と呼ぶ。）について、先行研究（cf. 村木(1983)、寺村(1983)、桑平(2007)など）を中心に構文の特徴についての議論をまとめ、この構文の基底構造として「AをBにして」のテ形節を認め、それから「して」を省略して「AをBに」構文が派生する統語メカニズムを理論的に考察した。具体的には、「AをBに」構文が派生するのは、テ形節が表す出来事が主節の出来事と継起関係がない時とする桑平(2007)の分析をふまえて、Nakatani (2003)のテ形節は主節を支配する機能範疇に依存し、継起関係を持つとの分析を採用

し、テ形節の統語構造を仮定して、それから「して」が省略され「AをBに」構文が派生する統語メカニズムを提案した。

鄭 汀 存在表現における中国語の「着」構文と日本語の「てある」構文の対応について

本稿は中日両言語の存在表現における「着」構文と「てある」構文の対応について影山(1996,2001,2009)の動詞の意味構造に基づき分析比較したものである。「着」構文と「てある」構文の対応関係を明らかにするためにはその動詞の意味構造を考察することが必要である。動詞の意味の体系についてはさまざまな考え方があがるが、本稿では、両言語の動詞の意味を影山の<行為>→<変化>→<状態>という行為連鎖の観点から考察する。なぜなら両言語の存在表現の対応関係を同じ概念構造において比較することがその違いや共通点より明確に現れるだけでなく、その枠組みの有用性と限界を明らかにすることも可能となるからである。

言語教育編

長谷川 信子・町田 なほみ 児童英語の語彙リスト — 『KUIS語彙リスト500』の開発過程とその全容—

本稿は、2011年から公立小学校で正課として導入される英語活動に活用可能な子ども用英語語彙リストの開発過程とその特徴を報告する。まず、先行研究を概観し、子どもの言語発達の観点から語彙習得の重要性を指摘した上で、町田他(2008)にて報告された「KUIS語彙リスト」の開発過程の概略を述べる。本論文では、その2008年版リストを改訂し、より汎用性が高く、教育現場での活用を視野に入れた『KUIS語彙リスト500』の開発過程を報告し、そのリストに含まれる情報などを詳細に紹介する。

長谷川 信子・町田 なほみ 子どもの言語力を探る：英語語彙テストと日本語語彙能力テストの結果から

本稿は、神田外語大学の早期英語教育プロジェクトが開発した子ども用英語語彙テストとそれと同時に実施した日本語語彙テストの結果から見られる子どもの言語力を報告するものである。子ども用英語テストの開発にあたっては、子どもの言語発達に配慮したテスト形式とし、両テストの構成と実施状況を報告する。さらに、それぞれのテストの分析結果を述べた後、テスト結果の相関結果から子どもの言語力の実態を考察する。

鎌田 倫子・渡部 学 中級科学トピック教材による知識フレームの活用

理系系大学院生の中級日本語クラスに知識フレームを活用した科学トピック教材を試作して学習者の日本語学習の促進を図った。学習者の読解力を表す構成的活動水準の高低や自然科学についての既有知識の多寡によって、科学トピックに対する好みや視覚的先行オーガナイザーの効果がどのように異なるかを調査した。その結果、1)科学トピックへの好みは上級学習者より中位以下の学習者の方が高い、2)視覚的先行オーガナイザーはテキストレベルの表象を生成する構成的活動水準3(読解力低)の学習者に対して有効であり、学習者自身の評価も高い、3)言語形式フレームの提示は状況モデルを生成する構成的活動水準5(読解力上位)の学習者に評価が高いこと等が明らかになった。科学トピック教材の理解と評価には科学についての既有知識の多寡、科学に関する知識フレームの有無が大きく関係することがわかった。

神谷 昇・長谷川 信子・長谷部 郁子・町田 なほみ 『英語ノート』における品詞割合と動詞の種類

本稿は、2011年から公立小学校で必修化される「外国語活動」の教材として文部科学省が編纂・配布した『英語ノート』を、そこに現れる語彙と表現に焦点をあてて、言語学・英語学の観点からその特徴を考察し、小学校での「外国語活動」(英語活動)で導入される文のタイプ・カタチを明らかにしようとするものである。本研究は語彙研究の1つではあるが、動詞に的を絞ることにより、語彙から構文、文の特徴を探るものであり、文法・構文研究に通じるものである。小学校の「英語活動」では、『学習指導要領』にも英語についての具体的な記述がないが、本稿での考察はそれを補うことになる。

小林 美代子

子どもの英語力を測る：語彙テスト開発の試み

本稿では、子どもの英語力測定のためのテスト開発の過程と試行テストの分析結果を報告する。2011年から公立小学校の5、6年生を対象に正課として英語活動が開始する。英語活動実施の実態を踏まえ、音声に焦点を当てるとともに、子どもの言語発達における語彙の役割の重要性を考慮し（Cameron 2001、小椋1999）、音声を中心とする英語語彙テスト（試行版）を開発した。Nation (2001)の語彙知識の理論的枠組みに基づく語彙知識評価の枠組みの作成、語彙の選定、テスト形式の選定などの観点からテスト開発過程を報告し、800余名の小学生による試行テストの分析結果に基づき、テストの信頼性・妥当性について討議するとともに、今後の研究課題についての示唆を考察する。

李 榮

文構造の複雑さが日本語学習者の内容再生に与える影響

本研究では、上級の日本語学習者と日本語母語話者を対象に、日本語の説明文における文構造の複雑さが内容再生に及ぼす影響について調べた。埋め込み節で統語的複雑さのレベルを操作した複数の説明文を与え、筆記による内容再生タスクを行った。複雑さのレベルは、1文当たりの従属節を基準として3つに分けた。量的分析の結果、学習者と母語話者共に、再生率において複雑さ条件による有意差は見られなかった。しかし、再生率の低い学習者では、複雑さ条件によって質的な違いが観察された。最も複雑な条件では、一文一文の理解には成功したものの、説明文全体を通しての理解は結束性に欠けていた。また、最も複雑でない条件では、明示的に提示されていない情報を推論によって補うことができない傾向が見られた。